

---

# 清教徒

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

清教徒

### 【Nコード】

N3660F

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

清教徒革命後のイングランド。王党派の貴族アルトウーロは王妃を救う為に恋人エルヴィーラの下を離れる。恋人に裏切られたと思つた彼女は狂つてしまう。しかしその彼女を救うのは。ベルリーニのオペラを小説にしました。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

## 序曲その一

### 序曲

イギリスはかつてイングランド、スコットランド、ウェールズ、そしてアイルランドの四つの国家に分かれていた。今はアイルランドは北部を除き独立してはいるがその正式名称が『グレートブリテン及び北部アイルランド連合王国』となっていることからこの国が連合国家であるということがわかる。

だがかつては四つの国家に分かれていたことは事実である。統一がなるのはアン女王の頃でありそれまではやはり別々の国であったのだ。それはエリザベス一世の頃においてもそうであった。

よくエリザベス一世の時代はイギリスの黄金時代と言われるが実情は決してそうした華やかなものではなかった。当時はまだイングランドという一小国に過ぎずハプスブルグ家のスペインや神聖ローマ帝国、ヴァロワ家のフランスとは国力においても家門においても劣っていた。イングランドのテューダー家は欧州では残念ながらハプスブルグやヴァロワの様な名門ではなかったのである。当時の権門の強い欧州においてはそこでも水を開けられていた。

国力もである。イングランドは土地が痩せフランスやスペインの様な大規模な軍隊を動員することは困難であった。そして彼等は後ろにスコットランドを抱えていた。この国の女王メアリーⅡスチュワートはエリザベスを見下しており自らがイングランドの王位継承者だと主張して憚らなかった。これがイングランドにとって頭痛の種でもあった。

そして宗教的な問題もあった。当時のイングランドは国教会であったがこれはエリザベスの父ヘンリー八世が定めたものである。事の発端は実に下らないものであった。彼が王妃と離婚し新しい妃を迎えようとしたのである。だがそれに教会が反対したのだ。

理由は表向きは宗教的な事情であった。カトリックでは離婚は認

められていないのである。だがそれはあくまで表向きのことであり、実際は教会は神聖ローマ帝国皇帝に配慮したのである。神聖ローマ帝国は言わずと知れた教会の第一の保護者でありその皇帝はハプスブルグ家の者である。イングランドと神聖ローマ、そしてもう一つハプスブルグ家が掌握するスペインのことを考えればどちらをとるかは一目瞭然であった。ハプスブルグとヴァロワの対立には何かと介入してきたローマ・カトリック教会も今回は迷う必要がなかったのだ。何故ならそのヘンリー八世の妃はハプスブルグ家の者であるからだ。

しかしヘンリーはそれに逆らった。そして自ら国教会を作り自らその首長となった。これにも実際には政治的な事情があり国内の力トリック勢力を抑えるのが目的でもあった。だがやり方があまりにも強引と言えば強引であった。しかも彼はもう一つ眉を顰めたくなるようなことをしてしまった。離婚して再婚したその新しい妃を何と断頭台に送ってしまったのである。この妃こそアン・ブーリン、エリザベスの母親その人である。彼女は断頭台において首切り役人に対してこう言ったと言われている。

「一太刀で頼むわね。けれどこんな細い首じゃそれもないでしょうけれど」

そして彼女の首は落ちた。これによりヘンリーは後々まで批判されることとなった。彼の不人気は凄まじいものであり彼の後ヘンリーと名のつく王は出ていないのである。これはジョンに匹敵するものである。それまでは七人も出ていたというのに彼の代でヘンリーは終わったのである。何とも人気のない国王ではあった。

彼はそれから離婚を繰り返す中にはまた断頭台に送られた元王妃もいた。王妃だけでなく家臣もよく断頭台に送った。結局それが彼の不人気を確固たるものになっているのである。彼の死によって断頭台は静かになった。しかし今度は火刑台が騒がしくなったのである。

エドワード六世の次に即位したのは女王であった。メアリー一世と

いう。彼女は過激なまでのカトリック信者であり彼女によりイングランドはカトリックに回帰した。そしてプロテスタントへの弾圧を開始したのである。これにより次々と新教徒達が火刑台に送られた。これには彼女の夫であるスペイン王太子フェリペ二世も苦言を呈した。彼はハプスブルグ家、すなわちカトリックの保護者である。その彼が言ったのだ。

まず彼はこう前置きした。

「プロテスタント達への処罰は当然である」

しかしこう付け加えたのだ。

「だがやり過ぎてはいけない。適度なところで止めるべきである」  
彼は本質的に政治家であった。信仰心は篤かったがそれは彼がハプスブルグ家であるからでもあった。カトリック、そしてハプスブルグ家の者としての義務を果たすだけであったのである。

しかしメアリーはそれを聞き入れなかった。プロテスタントへの弾圧をさらに激しくさせた。遂には腹違いの妹であるエリザベスすらもロンドン塔に送ったのである。この時彼女は一步間違えていれば処刑されていた。しかしかろうじてそれから逃れたのである。姉が死ぬと彼女が王となった。この時彼女はこう言ったと言われている。

「神の大いなる御業です」

と。こうして彼女はイングランドの女王となった。宗教においてはプロテスタントながらカトリックにも配慮した非常にバランスのいい政策を敷いた。だがそれでも外敵はいた。まずスコットランドであった。

メアリーとエリザベスは従姉妹同士であった。しかしだからといって仲がよいというわけではなかった。彼女達は互いに女王であった。そしてエリザベスは慎重であるのに対してメアリーはあまりにも軽率であった。彼女はその軽率さによってその身を滅ぼす。何と愛人と計って夫を暗殺し愛人と再婚してしまったのだ。これにスコットランドの貴族達が怒った。彼等はその夫ダーンリーとメアリー

の子ジェームスを立てメアリーを追い出しにかかった。これによりメアリーは亡命を余儀なくされたが彼女は何とエリザベスの下に逃げ込んできたのである。

これにはエリザベスも困った。只でさえイングランドの王位を主張して憚らず、そしてカトリックでもある彼女をイングランドに置くことはあまりにも危険であった。フランスやスペインがどう動くかわからなかったこともあった。

## 序曲その二

彼女は長い間悩んだ。家臣達はメアリーを処刑してしまうように何度も提案した。スコットランドの方もそれを願っていた。息子であるジェームスにとつても母は最早厄介者でしかなかったのだ。だがエリザベスは中々処刑に対して首を横には振らなかった。彼女は死刑を好まなかった。これは母が父に処刑されたのと姉のあまりにも極端な処刑を見てきたからであった。だからこそ彼女は処刑には慎重であった。ましてやメアリーは仮にもスコットランドの女王であり彼女の従妹でもある。王としての誇り、そして肉親への複雑な感情が彼女にサインをさせなかったのだ。エリザベスは決して冷酷な君主ではなかったのだ。そのうえその判断は極めて慎重なものであった。だからこそ国を守ってきたのである。

だが遂に彼女はサインした。サインしざるを得なかったのだ。何故ならメアリーがエリザベスの暗殺を企んだからである。証拠もあった。こうなつてはもう議会も家臣達も抑えることができなかった。彼女は泣きながら処刑にサインをした。こうしてメアリーは処刑された。それを聞いても息子のジェームスは何も驚かなかったという。やっと死んだと言わんばかりの態度だったと言われている。それを聞いてエリザベスは言ったという。

「不実な息子ですわね」

彼女の怒りはメアリーではなくジェームスに向いていた。そして彼女は従妹の亡骸を丁重に弔った。そして彼女が死んだ時後継者にはそのメアリーの息子ジェームスを指名した。それを聞いた時彼は飛び上がらんばかりだったと言われている。エリザベスはそんなジェームスのことを死の床で聞いてこう呟いたと言われている。

「メアリーも私も息子は持っていなかったようですね」

彼は即位すると宗教的にはかなり過激なことを実行した。異端審問を積極的に行いこれによりイングランドにおいても異端審問の惨

たらしい儀式が広まった。そして多くの無実の者が命を落としたのだ。そして彼は王権神授説の信奉者でもあった。エリザベスも絶対君主であつたが彼はそれ以上であつた。何故なら自らの王権は神によつて認められていると主張したのである。これを基として彼は専制政治を行つた。当然不満は高まつたが彼はそれを力で弾圧してきただのである。

彼の子であるチャールズ一世もそれを受け継いだ。彼は専制政治を理想とし議会とことあるごとに対立した。遂には内戦状態となつた。これが清教徒革命であつた。

何故清教徒革命と呼ばれたかといふとこの革命の指導者オリバー・クロムウェルが清教徒だつたからである。彼は極めて強烈な清教徒であり禁欲的かつ厳格であつた。天才的な指導力と軍事的、政治的能力、カリスマ性を併せ持っていた。だが他人に対しては自ら、そして信仰に対して絶対的な服従を強要する男であつた。彼だからこそ議会側は勝利を収めることができたが結果としてそれは国王よりもまだ厄介な独裁者を生み出す結果になつてしまつた。

彼は王を捕らえると処刑を指示した。しかし議会はそれに困惑した。それは何故か。

法律が存在しなかつたのである。国王を処刑する法律なぞ何処にもなかつたのだ。法がなくては何もできはしない。だからこそ彼等は困惑したのである。

だが革命とは言つなければ暴力による政権の強奪である。力のある者が絶対的な権力を掌握するものだ。乱暴な言い方をすればそうなる。そしてクロムウェルこそその実行者であつた。今やイングラントにおいては彼こそが絶対の法であつた。その彼が言つたのだ。王を処刑せよ、と。それで全ては決した。

こうしてチャールズ一世は処刑されることとなつた。だが彼はそれを聞いても動じはしなかつた。彼はまず側に残つたまだ幼い子供達を呼んだ。そしてこう言つた。

「これからは私ではなくそなた達の兄に仕えるのだ」



そして身を慎み死刑の時を待った。彼は黒づくめの服に身を包み、ガーター勲章をかけて処刑場に向かった。そして最後まで王であり、王として死んだ。王の首を見た多くの者は憤りを露わにしたという。彼もまた王として立派であった。だからこそ彼の支持者も多かったのだ。同時にクロムウェルへの反発者も多かった。

王が死んでもまだ戦いは終わらなかつた。これはそうした清教徒革命における一つの恋の話である。人々はいかなる時代においても恋を忘れることはできないのである。

## 第一幕その一

### 第一幕 破れた婚禮

ここはイングランド北西のプリマスノ城である。ここに一つの城があつた。遠くには山々が美しい景色を見せている。だが空はようやく明るくなつてきた頃である。城の中では兵士達が警戒にあたつていた。

「異常はないか」

「ああ」

兵士達は口々にこう言い合う。そしてそれぞれの持ち場を守つてゐる。そこに一人の兵士達のそれとは一風変わったやは豪華な鎧を着た金髪の男がやつて来た。兵士達は朝もやの中彼の姿を認めて声をかけてきた。

「これはブルーム様お早うございます」

「お早う」

彼は笑顔で兵士達に対して言葉を返した。彼はこの城にいる将校の一人である。この城は清教徒達の城であり当然彼も清教徒である。

「朝早くから御苦労だな」

彼は微笑んで兵士達に対してそう声をかけた。

「いえ、これも任務ですから」

兵士達はそう返事を返す。吐く息は白くその顔は引き締まっていた。

「そうか、頼もしいな」

「有り難うございます」

「戦いはまだ続くだろう、これからも頼むぞ」

「はい」

彼等はそう挨拶を交わした。そして分かれた。ブルームは庭に向かった。そこへ一人の若い兵士がやつて来た。

「どうした」

「はい、今日のことを確かめたくて参上致しました」  
兵士は慎んでそう答えた。

「今日はエルヴィーラ様のご婚礼の日でしたね」  
「うむ」

彼はそれに頷いた。

「その証拠に聞くがいい」

彼はそう言つて城の中を指差した。そこから賛美歌が聴こえてくる。人々は朝のミサを行っているのだ。

「いつもの歌とは違うだろう」

「はい」

兵士はその言葉に頷いた。

「まるで天界から聴こえてくるようでございます」

「天界からか」

「そう聴こえませんか」

「ふふふ、確かにな」

ブルームはそれに同意して微笑んでみせた。そしてまた言った。

「あそこにはな、エルヴィーラ様もおられるのだ」

「だからですか」

「そうだ。今のあの方は何時にも増してお美しい。そう、まるで天界から降り立たれたようにな」

ブルームは恍惚とした声でそう語った。

「今日の御声は普段のそれとはさらに違う。まるで天界の調べだ」  
「全くです」

兵士もその歌をうっとりとして聴いていた。

「これが幸福に向かわれる方の御声なのですな」

「そうだ。そして我々がしなければならぬことは」

「はい」

兵士はブルームに顔を戻した。

「祝うことだ。よいな」

「わかりました」

兵士は頷いた。彼等が庭に着くとそこには子供達がいた。彼等は  
その手にそれぞれ色とりどりの花を持っていた。

その花で庭を飾っていく。何時しか庭は花の園となっていた。

「御苦労」

ブルームは子供達に対してそうねぎらいの言葉をかけた。

「それでは今日のこの日を共に祝おう。よいな」

「はい」

子供達はそれに頷いた。そして庭から一人また一人と去って行っ  
た。ブルームはそれを見届けながら兵士に対して言った。

「そなたも今は持ち場に戻るがいい。よいな」

「はい」

兵士はそれを受けて敬礼してその場を離れた。そして庭にはブル  
ーム一人となった。

彼は暫くその場にたたずんでいた。そして花を見ていた。

「美しい」

彼は一言そう呟いた。

「この花達こそあの方に相応しい。だがどれだけの花があるうとも  
あの方御一人にすら適うことはできないのだ」

そう一人呟いていると庭にもう一人姿を現わした。蜂蜜色の髪と  
顎鬚を生やした若い男である。

やはり彼も鎧を着ていた。だがそれはブルームのものよりさらに  
立派である。そしてマントを羽織っている。それを見るとそれなり  
の身分にある男であることがわかる。顔も精悍で風格が漂っている  
が何処か陰がありそしてその表情は暗いものであった。

「ふう」

彼は溜息をついた。それから庭を見渡した。

「花で飾られているのか」

「はい」

ブルームはそれに応えた。

「先程城の子供達が飾ったものであります」

「そうか、子供達には褒美が必要だな」

「ええ。ところでどうかされたのですか」

ブルームは彼を心配するような声をかけた。

「普段のリツカルド様とは思えません」

「そうか」

その男リツカルドはそれを聞いて寂しい笑みを浮かべた。

「ブルーム殿」

「はい」

「今の私には何があるかな」

「それはまたご冗談を」

ブルームはそれを聞いて笑った。

「栄光と神が。リツカルド様にはその二つこそが相応しい」

「その二つだな」

「はい」

「ではそこに愛はないのですな」

「いや、これは失敬」

ブルームはそれを聞いて慌てて言葉を引っ込めた。

## 第一幕その二

「何かあったのですか」

「いや、実は」

彼はそれを受けて話をはじめた。

「エルヴィーラのことですが」

「何かあったのでしょうか」

「この前の戦いに赴く時私は言われたのですよ。あの方の御父上に」

「はい」

それを聞いたブルームの顔が引き締まる。

「この戦いで功を挙げたならば私にあの方を与えて下さると。そして私は戦場で勇敢に戦いました。ですが」

「事情が変わったと」

「そうです。エルヴィーラはアルトゥーロと結ばれることになってしまった。何という残酷な運命なのでしょうか」

「リツカルド様」

ブルームは落ち着いた声で彼に対して言った。

「はい」

「心を鎮められなさい。先程も言いましたが貴方には栄光と神がついておられます」

「神が」

「そうです。だから御安心下さい。貴方にはきっと幸福が訪れます。ですから心をお鎮め下さい。よいですね」

「わかりました」

リツカルドはそれを受けて頷いた。

「それでは貴方の御言葉に従います。それで宜しいでしょうか」

「はい」

ブルームも頷いた。そこでリツカルドを呼ぶ声がした。

「リツカルド様、貴方の隊が貴方を呼んでいますぞ」

「はい」

「貴方は彼等の隊長です。行かなくてはなりませんぞ」

「わかつております。それでは」

「はい」

「私も途中まで同行しましょう。では行きましょう」

「お願いします」

こうして二人は庭から去った。庭には花が咲き乱れている。それが朝もやの中に浮かぶ様はまるで夢の園のようであった。

ミサが終わるとそれに参加した者はそれぞれの部屋に戻った。質素なゴシック調の城の中を慎ましい服に身を包んだ者達が進む。その中にはエルヴィーラもいた。

赤い服を着ている。その服は決して豪華なものではないが彼女によく似合っていた。そして黒い髪を長く垂らしている。まるで黒絹のような髪である。

黒い瞳は琥珀の様である。それが白く整った顔で輝いている。まるで宝石のようであった。

唇は赤く炎の色をしちえる。そして鼻は高い。何処かギリシア彫刻を思わせる美貌であった。背も高く歩く姿も落ち着いたものであった。遠くからでも目につく印象的な容姿の持ち主であった。彼女がエルヴィーラである。この城の城主の娘でありイングランドにその美貌を謳われた絶世の美女でもある。この日彼女は幸福の中にいた。

「叔父様」

彼女はゴシック調の窓がある自分の部屋に入ると後ろにいる白い髪と髭の老人に顔を向けた。見ればやはり質素な服とマントに身を包んでいる。彼の名はジョルジヨ、彼女の叔父である。

「どつしたのじゃ」

彼は優しい声でエルヴィーラに話しかけてきた。

「今日のことですけれど」

エルヴィーラは不安と期待を混ぜ合わせた声で彼に対して言った。

「うむ」

「どうなるのでしょうか、私はこれから」

「不安なのだな」

「はい」

彼女はそれに答えた。

「不安です。これからのことを思いますと」

「それなら心配ない」

ジョルジヨは美しい姪に対して優しい声でそう語りかけた。

「そなたは自分を信じるのじゃ」

「自分を」

「そうじゃ」

彼は言った。

「そなたの様な心まで美しい者はそうはおらぬ。その様な者を神が  
どうして選んでおらずにいられようか」

「神が」

「そう、神じゃ」

彼は強い声で彼女に対して言った。

「そなたには神の御加護がある。だから安心するがよい」

「わかりました」

エルヴィーラはそれに頷いた。

「けれど私は誰と結ばれることになるのでしょうか」

「不安なのか」

「否定はしません」

彼女はこくり、と頷いてそう言った。

「この心の不安を何としても取り除きたいのです」

「そうか」

ジョルジヨもそれを聞いて頷いた。

「そなたは誰と結ばれるのかそれを知りたいのだな」

「はい」

彼女は答えた。



### 第一幕その三

「私の生涯を共にする方なのですから」

「わかった」

「ジョルジヨはそれを聞いてまた頷いた。」

「それでは言おう」

「はい」

エルヴィーラは顔を上げた。そしてジョルジヨを見据えた。

「あの人だ」

「あの人」

「そうだ、そなたが思い焦がれているあの人だ」

「ジョルジヨは優しい笑みを浮かべてそう答えた。」

「わかっただろうか」

「はい」

エルヴィーラは笑顔でそれに答えた。

「アルトウーロですね」

「うむ」

「それは本当なのですね」

「私が今まで嘘を言ったことがあるか」

「ジョルジヨは微笑んでそれに応えた。」

「ないだろう。違うか」

「いえ、違います」

エルヴィーラはそれに応えた。

「それでは私にはこれから幸福が」

「うむ、その通りだ。そなたには幸福の天使が翼を広げて祝福を与えてくれているのだ」

「ジョルジヨは優しい声でそう語り掛けた。」

「嬉しいだろう」

「はい」

エルヴィーラはまた頷いた。

「天にも昇らんばかりです」

「私もだ」

「叔父様も」

「うむ。今まで私はそなたを本当の娘のように思ってきた。そして育ててきた」

「はい」

これは事実であった。ジヨルジヨには娘はいなかった。息子達は皆戦場に赴き一人として家には残ってはいない。皆それぞれ分かれてしまったのだ。家には年老いた妻しかいない。彼は実は愛に餓えていたといつても過言ではなかったのである。

「その娘が今ようやくやく幸せになるのだ。それが嬉しくない筈がなかろう」

「私を娘と呼んで下さいますか」

「他に何と呼べばいいのだ」

彼は逆に問うた。

「私は他に何と呼んでいいのかわからないのだが」

「それ程までに私を」

それが嬉しくてならなかった。エルヴィーラは貴族の娘である。

貴族の娘は親と離れて育つことも多い。とりわけ彼女のような身分ならばだ。彼女もまたそういう意味で愛に餓えていたのである。

「そなたには恵み深い神が祝福を与えて下さるだろう」

「祝福を」

「そうだ、そなたは純潔な百合だ、神は百合を愛される。ならばそなたも愛されるのだ」

「けれどどうして私があの方と結ばれるようになったのでしょうか」

エルヴィーラはふとそう尋ねた。

「最初は違った筈ですが」

「それが」

ジヨルジヨはそれを受けて彼女に顔を向けた。

「実は私がそなたの御父上に口添えしたのだ」

「叔父様が」

「そうだ。そなたがアルトゥーロ殿を慕っているのを知っていたからな。それで動いたのだ」

「そうだったのですか」

「彼は王党派だ。だがそれ以上に私は彼の心意気をよく知っていた」  
「はい」

「だからこそだ。そなたに相応しいと思ってな。だから私は口添えをしたのだ」

「有り難うございます」

「礼はいい」

しかしジョルジヨはここでこう言った。

「私は自分の気の済むようにしただけなのだから」

ここには他にも複雑な問題が色々あったであろうことはエルヴィーラにもわかっていて。貴族の婚礼とは政治的な意味合いが強い場合が多い。エルヴィーラの家もアルトゥーロの家も権門の家であった。家同士の結び付きを強める為でもあるのは彼女にもわかっていて。おそらくこれはクロムウエルの考えであろうということは容易に予想がついた。それにより王党派を懐柔する為である。自らに反対する者には一切妥協も容赦もないクロムウエルだがそれでもそうした政治的な感覚は忘れてはいなかったのである。それでも嬉しいことには変わりがなかった。

「父はそれを認めて下さったのですね」

「うむ」

ジョルジヨは頷いた。

「そなたに幸福が訪れるようにと決断してくれたのだ」

「何ということ」

「人は何によって幸福となるか」

ここでジョルジヨは言った。

「それは愛情によってだ。エルヴィーラよ」

「はい」

「幸せになるようにな」

「わかりました」

彼女はそれに応えて頭を垂れた。喜びで今にも涙が零れそうであった。そこへ城の彼方から角笛の音が聴こえてきた。二人はそれに顔を向けた。

## 第一幕その四

「あれは」

「聴こえたか、あの笛の音が」

「ジヨルジヨはそれを聴くとエルヴィーラに顔を向けた。

「あれがそなたの幸福を呼ぶ音なのだ」

「それでは」

「エルヴィーラはそれを聞くと顔を明るくさせた。

「そうだ。アルトウーロ殿がこの城に参られたのだ。用意はいいか」

「勿論です」

「エルヴィーラは答えた。

「けれどももう胸が張り裂けそうです」

「喜びでか」

「はい。まるで夢のよう」

「夢ではない」

「ジヨルジヨはそう語り掛けた。

「現実なのだ、全ては」

「ここで角笛がさらに高らかに鳴った。そしてアルトウーロと彼の軍が城に入った。彼等は歓声の中城に入ってきたのであった。それはまるで天界から舞い降りた神の軍勢のようであった。

「アルトウーロはそのまま宮殿へと向かった。その後ろには武装した将兵と数々の婚礼の贈物を持った従者達が続いている。その中には純白のヴェールもあつた。

「アルトウーロ様万歳！」

「城の将兵達が彼に対して万歳を唱えていた。

「アルトウーロ様に栄光あれ！」

「有り難う」

「彼はそれに応えて微笑んだ。黒い髪を後ろに撫で付けた端整な顔立ちの青年であつた。背はそれ程ではないが顔は明るく、そして気

品が漂っていた。髭はなく、それが白い顔を際立たせていた。青い豪華な鎧と紅のマントを羽織っている。まるで円卓の騎士の様な姿であった。

彼と将兵、そして従者達は中庭へ進んでいった。そこは既に花で飾られていた。

「何と美しい」

アルトウーロはその庭を見て一言こう言った。

「この様な美しい庭を見たのははじめてです」

「左様ですか」

それを出迎えたジョルジョがそれに応えた。

「それは何よりです。城主も喜ばれることでしょう」

「それですが」

アルトウーロはそれを受けて彼に問うた。

「城主殿は何処でしょうか」

「こちらです」

ジョルジョは案内した。そしてアルトウーロはそれを受けて城の中へと進んだ。

彼は城主の間に入った。そこでは威厳のある顔立ちの壮年の男が立っていた。黒い濃い髭を生やしている。彼がエルヴィーラの父ヴァントンであった。

「ようこそ、アルトウーロ殿」

ヴァントンはアルトウーロを微笑んで出迎えた。見ればかなり背のある人物であった。しかし威圧的なものはなくその物腰は穏やかであった。

「今日貴方が来られることをどれだけ待ち望んだことか」

「有り難うございます」

彼はそれを受けて頷いた。

「私もここへ来るのを心待ちにしておりました」

「そうですね、それは有り難い」

ヴァントンはそれを聞いて笑った。

「それではエルヴィーラを呼ぼうか。弟よ」

彼はジョルジョに顔を向けた。

「娘を呼んでくれ」

「わかりました」

彼は頭を垂れると一先退室した。そして暫くしてエルヴィーラを連れて部屋に戻ってきた。

「おお」

アルトウーロは彼女を見て思わず感嘆の息を漏らした。

「何と麗しいお姿か」

「お気に入られましたかな」

ヴァントンはアルトウーロに声をかけてきた。

「それならば何よりですが」

「勿論です」

彼は恍惚とした声で答えた。

「この日を神に心から感謝致します」

「それは何よりです。さて」

彼はここで一枚の書類を取り出した。

「これを貴方にお渡ししましょう」

「これは」

彼はそれを手に受け取ってヴァルトンに対して問うた。

「これは通行証です。これで貴方は寺院に自由に出入りすることができます」

「ならば私と彼女のことを認めて下さるのですね」

「はい」

笑顔で頷いた。これは婚礼の儀のうちの一つであった。

「勿論です。貴方は我が弟が認めた程のお方」

ここでジョルジョに顔を向けた。彼はこの弟を心から信頼しているのである。

「是非とも我が息子となって頂きたい」

「かたじけない」

彼はそれを受けて頷いた。

「それでは謹んでその通行証をお受け致します」

「有り難うございます」

彼は通行証を手渡してアルトウーロに対して言った。

「それでは娘をお願いしますぞ」

「はい」

「さて、それでは」

婚礼の本格的な儀に入ろうとする。だがここで一人の将校が部屋に入って来た。

「伯爵」

「どうしたのだ」

ヴァルトンはそれを受けてその将校に顔を向けた。

「あの女性が来られました」

「そうか。思つたより早かつたな」

彼はそれを聞いてそう呟いた。そしてアルトウーロに顔を戻した」

「アルトウーロ殿」

「はい」

「申し訳ありませんが暫く席を外させていただきます」

「わかりました」

ヴァルトンはそう言つて席を外した。ここで彼は中庭に向かった。

「アルトウーロ殿」

それにかわつてジョルジョが彼に声をかけてきた。

「暫しのご辛抱です。お待ち下さいませ」

「わかりました」

彼はそれを受けて頷いた。そしてちらりと窓に目を向けた。中庭が映つた。するとそこには一人の貴婦人がいた。

「あれは」

彼はその貴婦人を見て思わず目を疑つた。

「如何されました!？」

「いえ」



「ジョルジョに声をかけられ慌てて表情を元に戻した。

「何でもありません」

「そうですか」

だが彼にはアルトゥーロの動揺がわかった。しかしそれはあえて言わなかった。

## 第一幕その五

「それでは宜しいですね」

「はい」

彼はちらりとまた窓を見た。ヴァントンがその貴婦人に声をかけていた。

「どうも」

これはアルトウーロには聞こえない。ヴァントンとその貴婦人の間で話されていることであつた。

「レディ」

「はい」

見ればその貴婦人が豪華な服を身に纏っている。そして蒼ざめた顔でヴァントンと向かい合っていた。

「議会が貴女を探しておられておりました」

「わかつております」

やはり蒼ざめた声でそう応えた。

「それでは旅への用意をお願いします。宜しいでしょうか」  
「謹んで」

「わかりました。それではお供は私が務めさせていただきます」

「お願いします」

「はい」

こうしたやりとりが行われていた。アルトウーロはそれを蒼白の顔で見守っていた。

（何ということだ）

彼は青い顔で心の中で呟いた。

（あの方がここにおられるとは。何とかしなければ）

だがどうするか。彼は考えた。そしてジョルジョに対して言った。

「申し訳ありません」

「何でしょうか」

「ジョルジヨはそれに対して顔を向けた。」

「暫く席を外したいのですが宜しいでしょうか」

「何かあったのでしょうか」

「エルヴィーラがそれを聞いて顔を怪訝そうにさせた。」

「いえ」

「ここで彼はそれを宥める為にあえて笑みを作った。」

「私の隊のことで。不都合を思い出しましたので」

「不都合に」

「はい。ですから暫くここを離れたいのです。宜しいでしょうか」

「火急の用でしょうか」

「ええ、まあ」

彼はそう取り繕った。そしてジョルジヨを見た。

「ふむ」

ジョルジヨはそれを聞いて考え込んでいた。だがすぐに口を開いた。

「わかりました。それでは兄には私から申し伝えておきましょう」

「かたじけない」

アルトウーロはそれを聞いて顔を崩した。

「それではお願いします。すぐに戻ってきますので」

「はい。それではここはお任せ下さい」

「わかりました」

それを受けて彼は部屋を離れた。そしてジョルジヨとエルヴィーラだけが部屋に残った。

「叔父様」

彼女は不安そうな顔でジョルジヨに顔を向けてきた。

「すぐに戻ってこられるでしょうか」

「勿論だよ」

彼は姪を宥めるように優しい声でそう語り掛けた。

「彼は必ず戻って来るよ。だから気をしっかりと持つんだ。いいね」

「わかりました」

彼女はそれを聞いて不安を胸に抱きながらも頷いた。

「それではそうします」

「うん」

ジョルジヨはエルヴィーラを守るように側に寄った。アルトゥーロはその間に中庭の出口に来ていた。そしてそこから身を擧めて中庭を窺った。見ればまだヴァルトンがいた。

「これ」

彼は従者に声をかけていた。

「馬を用意してくれ。いいか」

「はい」

従者はそれに頷いた。そして彼に対して言った。

「どの馬が宜しいでしょうか」

「そうだな」

それを受けて考える。

「私が選ぶ。それが一番だからな」

「わかりました」

それを受けて彼等は中庭を去った。後には貴婦人だけとなった。

アルトゥーロはそれを見て中庭に入った。そして貴婦人に声をかけた。

「王妃様」

「私をそう呼ぶのは」

彼女は驚いた顔で声がした方を向いた。そこにアルトゥーロがいた。

「私です」

彼は謹んで頭を垂れた。

「カヴァリエーレ侯爵、何故ここに」

「婚礼の為にこの場に来ておりました」

彼はそう答えた。

「陛下こそ何故ここに」

「私が夫と同じ運命を辿るとするならばここにいるのは当然でしょ

う

彼女は悲しい顔をしてそう答えた。

「それでは」

「はい。私もまた送られるのです、処刑台に」

「そんなことが許される筈がありません」

「それはどうでしょう」

だが彼女はそれに対してそう返した。

「我が夫がそうであったようにこのエンリケッタもまた」

「天が許しません」

「天が、ですか」

「はい」

「しかし彼はどうでしょうか。クロムウエルは」

「それは……」

アルトウーロはそう言われ返答に窮した。

「今イングランドはクロムウエルこそが法であり正義なのです。そして天なのです」

「それではまるで神ではありませんか」

「悲しいことですがそうです」

エンリケッタはそう答えた。

## 第一幕その六

「だからこそ私も……それはおわかりですね」  
「陛下」

アルトウーロは跪いてエンリケッタに対して言った。

「ここに私があります。私がいる限りそのようなことはさせません」  
「クロムウエルを怖れないのですか？」

「何故彼を怖れる必要があるのです」  
毅然として顔を上げた。

「私が怖れるのはただ一つ」  
彼は言った。

「陛下、貴女の御命が消えることです。他には何もありません」

「宜しいのですか？」

「はい」

彼は答えた。

「その為にここへ参ったのですから」

「しかし」

エンリケッタは戸惑っていた。

「侯爵、貴方は婚礼の為にここへ来られているのでしょ

「はい。ですが陛下の為ならばそれも喜んで捨てましょ

「なりません」

「何故ですか」

「貴方は貴方の幸せを考えなければなりませんから

「臣下の幸せは陛下の御命が保たれることです」

「なりません」

エンリケッタはまた言った。

「貴方は幸せにならなければなりません。私はもう覚悟はでき  
ていますから」

「陛下」

アルトウーロは強い声を発した。

「是非とも私の言葉を聞き入れて下さい」

「しかし」

「それこそが私の望みなのですから」

エンリケツタは返答に窮していた。そこにジョルジヨとエルヴィーラがやって来た。

「いかん」

アルトウーロはそれを見て急いで立ち上がった。そして二人に顔を向けた。

「どうしてここに」

「従者に呼ばれまして」

「従者に」

「はい」

ジョルジヨは答えた。

「侯爵が用を済ませられたとかで。そうですね」

「ええ、まあ」

何かの手違いであるようだ。だがアルトウーロはここはそうであると言っことにした。

「少し手間取りましたが」

「そうでしたか。しかし終わって何よりでしたな」

「はい」

「侯爵」

エルヴィーラはアルトウーロに声をかけてきた。

「何でしょうか」

「もうすぐ礼拝堂に行かなければなりません」

「ああ、そうでしたね」

アルトウーロはそれに対して頷いた。

「もうそんな時間ですか」

「はい」

エルヴィーラは頷いた。

「一緒にいきましよう」

「そうですね。まずはヴェールを」

「こちらに」

それはジョルジヨが持つて来ていた。アルトウーロにそれを手渡す。

「どうも」

彼は頭を垂れてそれを受け取る。そしてそれをエルヴィーラの頭にかけた。純白の天使の衣の様なヴェールであった。

「何という美しさか」

ジョルジヨはヴェールを被ったエルヴィーラの姿を見て感嘆の言葉を漏らした。

「私はこの日を見る為に今まで生きてきたのだ」

「叔父様」

「エルヴィーラよ」

彼は姪に声をかけてきた。

「幸せになるようにな。よいな」

「はい」

彼女は頷いた。そしてアルトウーロの方へ一歩出た。

「侯爵、では参りましよう」

「はい」

アルトウーロは頷いた。だがここでジョルジヨが言った。

「お待ち下さい」

「何か？」

二人は彼に顔を向けた。

「まだ御父上が来られてません。礼拝堂へ行くのはそれからでよいでしょう」

「そうでしたね」

エルヴィーラはその言葉にハツとした。

「それではそれまで待たなければ」

「そう。それでは部屋に戻るうか」



「はい」

こうして二人は部屋に戻った。だがアルトウーロは庭から動かなかつた。

「どうされたのですか」

ジョルジョが彼に問うた。彼はそれに答えた。

「いえ、女性を一人にしてはおけないので」

そう言つてエンリケッタに顔を向けた。

「伯爵が戻つてこられるまで私はここにおります」

「そうですか。それではお願いします」

「はい」

こうしてエルヴィーラとジョルジョは庭を後にした。後にはアルトウーロとエンリケッタだけが残つた。アルトウーロはエンリケッタに顔を向けた。

## 第一幕その七

「では行きましょう」

「宜しいのですね」

「はい」

アルトウーロは答えた。

「その為に私はここに残ったのですから」

「そうですか。それでは」

「行きましょう。私が御護りします」

エンリケッタの手をとった。そして庭を出ようとする。だがその時だった。

「ふう」

リツカルドが悩んだ様子で庭に入って来た。アルトウーロはそれを見て身構えた。

「誰だ」

「私か」

リツカルドはそれを受けて顔を上げた。悩み疲れた顔であった。

「リツカルドだ。知っているか」

「名前だけは」

「だが今はそれはどうでもいことだ。ところで卿は何処へ行くつもりだ」

「少しな。急用ができて」

「そうか。ところで後ろにいる女性は」

彼はエンリケッタの姿を認めて目の光を強くさせた。

「この方が」

「そつだ。どうやら今日捕らえられた王党派の婦人のようだが」

「それは」

「間違いはないな」

リツカルドの目に光が戻ってきた。彼は悩む男から軍人にと変わ

っていた。

「どうなのだ」

「そうだ」

彼は答えた。

「卿の言う通りだ。この貴婦人は王党派の方だ」

「そうか。では何故彼女を連れてきているのだ？」

「それは」

「答えられないのか？」

リツカルドは問うてきた。

「どうなのだ？ 答えられないとでもいうのか」

「いや」

だが彼はそれには首を横に振った。

「ならば答えよう。よいか」

「うむ」

「私はこの方を守る義務があるのだ」

「何！？」

それを聞いたリツカルドの目の色がまた変わった。

「今何と言ったのだ？」

軍人からさらに戦う者の目となっていたのである。

「もう一度言ってみろ。何と言ったのだ」

「では言おう」

覚悟を決めていた。アルトゥーロはまた言った。

「私はこの女性の方を守る義務がある、と言ったのだ」

「本気だな」

「そうだ」

強い声で答える。

「だから今ここにいるのだ」

「わかった」

リツカルドはそれを聞いて頷いた。

「それでは覚悟はいいな」

「無論」

二人はそれぞれ剣を引き抜いた。庭に白銀の光が煌きその剣に花が映っている。彼等はそれを見ながら互いを見やった。

「行くぞ」

「うむ」

そして斬り合おうとする。だがそこでエンリケッタが間に入ってきた。

「お待ち下さい、侯爵」

「陛下」

「侯爵！？陛下！？」

それを聞いたリツカルドの顔に疑念の色が漂う。

「まさか貴公は」

「カヴァリエーレか」

「そうか、貴公があの」

「知っているのか」

「無論。名はよく聞いている」

リツカルドもその名は聞いていた。アルトゥーロは王党派の重鎮の一人として名を馳せているのです。

「何故ここに」

「婚礼の為だ」

彼はそう答えた。

「エルヴィーラと結ばれる為にここへ来たのだがな。しかし」

「そうか」

リツカルドはそれを聞いて考える目をした。

「……………」

彼は考えた。それから言った。顔を上げてきた。

「通るがいい」

「どういうことだ？」

道を開けたリツカルドに対して問うた。

「考えが変わった。それだけだ」

リツカルドはそう答えるだけであつた。顔からも目からも表情は消している。

「どういつつもりだ」

「答える必要はない」

「そう言葉を返した。」

「だが今通らなくてはならないのはわかるだろう」

「むづ」

その通りであつた。今の彼にはここを通らなくてはならないのだ。彼の主の為には。

「行くがいい。それについて私は止める気はなくなつた」

「陛下」

アルトウーロはエンリケッタに顔を向けた。彼女はそれに答えた。

「貴方の思われるように」

「わかりました」

それを受けて頷く。それも決まりであつた。

「では行こう。それでいいのだな」

「うむ」

リツカルドは頷いた。

「行くがいい。私が言うことはそれだけだ」

「わかつた。それでは陛下」

「はい」

「行きましょう」

こうしてアルトウーロは庭を後にした。そして自身の馬と兵達を連れエンリケッタを伴って城を後にした。その動きは素早くまるで風のようにあつた。

「これでよし」

リツカルドはニヤリともせず一言そう呟いた。

「愚かな男だ。だがそれでいい」

そう言いながら上を見上げた。そこには宮殿があつた。

「これで私の想いが適うのだとしたらな。愛を手に入れる為ならば」

言葉を続ける。

「悪魔にでも魂を売る。それであの人が手に入るのならば安いものだ」

「リックアルド殿」

ここでジョルジョが出て来た。

## 第一幕その八

「どうされたのですか」

リツカルドは表情を穏やかなものにして彼に語りかけた。

「いえ、アルトウーロ様のお姿が見えないので。何処に行かれたのかと思ひましてな」

「彼ですか」

それを聞いて何か知っているような声を出した。

「御存知なのですか？」

「はい」

彼は答えた。

「今何処におられるのでしょうか」

エルヴィーラも来た。ブルーノ達もだ。またヴァルトンもやって来た。

「貴婦人を知らないか」

彼もリツカルドに尋ねてきた。

「姿が見えないのだが」

「あの赤い服の方ですね」

「うむ」

ヴァルトンは頷いた。

「それなら知っておりますよ」

「それは本当か!？」

「はい」

彼は答えた。

「そして侯爵の居場所も」

「それは何処のですか!？」

エルヴィーラがそれを聞いて彼に尋ねる。リツカルドはその時彼女を一瞬見た。それから少し間を置いて彼女に問うた。

「お知りになりたいのですか」

「はい」

彼女は少し焦りを感じながら答えた。

「是非共お願いします」

「わかりました」

リツカルドはそれを聞いて頷いた。やたらと勿体ぶっているように見えるので皆それが不思議ではあった。

「それではお話ししましょう」

「はい」

「御二人は一緒です」

「何!？」

皆それを聞いて驚きの声をあげた。

「侯爵とあの貴婦人は共に城を出られたのです。今しがた」

「馬鹿な、そんな筈が」

ジョルジヨはそれを聞いて驚きの声をあげた。

「そんなことは有り得ない」

「では証拠を申し上げますか」

リツカルドは強い声でそう言った。

「彼の兵は今何処にいますか」

「それは」

ヴァルトンはそれを受けてアルトウーロの兵を探させた。だが城の何処にもいなかった。

「そういうことです」

リツカルドはそれを受けて言った。

「彼は逃げました。あの貴婦人を置いて」

「それは何故」

「言わなくともおわかりでしょう」

リツカルドはエルヴィーラの問いに対してそう答えた。

「違いますか」

「う……」

エルヴィーラは口籠もった。これには彼女も困った。



「何も……」

「そういうことです。それでは宜しいでしょうか」  
「ヴァルトンに顔を向ける。」

「戦いの準備を。目指すは侯爵の首」

「あの方の！」

「はい」

エルヴィーラに対してまた答える。

「それ以外に何があるというのです」

「そんな……」

それを聞いてエルヴィーラの顔が青くなった。

「けれど本当かどうか」

「私は見たのです」

しかしエルヴィーラの逃げ道を塞ぐようにしてそう言う。

「彼が貴婦人と共に逃げるのを。他に証拠が必要でしょうか」

「うとう……」

呻いた。それ以上は言うことができなかった。

「私はどうすればよいのでしょうか」

「それは……」

リツカルドは計算違いをしていた。彼はあくまでアルトゥーロへの個人的な感情だけで動いているに過ぎなかったのだ。エルヴィーラの心までは知らなかった。それを知るにはあまりにも周りが見えなくなってしまうていたのであった。それが彼の過ちであった。

「諦めるしかないでしょうな」

そう言うしかなかった。そしてそれが決定打となってしまった。

「そんなこと……私にはできない」

一言そう言った。そして様子が急変した。

「私はあの方の妻なのですから。そう、そうでなければエルヴィーラではない」

「えっ!？」

皆それを聞いて驚きの声をあげた。

「エルヴィーラ様、今何と!？」

「私はエルヴィーラではありません」

彼女は一言そう言った。

「御氣を確かに」

「私はあの方がおられない限りエルヴィーラではありません。いえ」  
そして虚空を見た。それを見て笑った。

「あの方が来られました。これで私はようやくエルヴィーラとなったのです」

「馬鹿な、何ということだ」

ヴァルトンはそれを見て絶望の声をあげた。

「この様なことになるとは」

「何と……」

ジョルジヨは呆然としていた。何と言っているかわからなかった。それは他の者も同じであった。

「如何致しましょう」

オロオロとしてヴァルトンやジョルジヨに対して尋ねる。だが二人は答えられない。それが余計事態の悪化に拍車をかけることとなつたのである。

「ジョルジヨ」

だがヴァルトンはその中でジョルジヨに顔を向けてきた。

「はい」

「娘を部屋に案内してくれ。そしてそつとしてやるのだ。いいな」  
「わかりました」

彼は頷いた。そしてエルヴィーラに声をかけた。

「アルトゥーロ殿と出会えて楽しいか」

「はい」

彼女は笑顔で答えた。だがその視点はもう定まっていなかった。明らかに狂気の目であった。

「そうか」

彼はそれを聞いて頷くだけであった。それ以上はとても言うこと

はできなかった。

「それでは部屋に行こう。彼が部屋で待っているからな」

「叔父様、何を仰っているのですか」

エルヴィーラはそんな彼に対して言った。

「あの方はここにおられますわ」

「そうか、そうだったな」

あえて言わなかった。ここは彼女に従うことにしたのだ。だがそれでも言った。

「婚礼の儀の為だ。ここは部屋に戻れ」

「叔父様も来られますね」

「勿論だ」

笑みを作ってそれに応える。

「だから今は部屋に戻れ。そのヴェールが汚れないように」

「あの方の贈って下さったヴェールが」

「そうだ。では行こうか」

「はい」

こうしてエルヴィーラはジョルジョに連れられて自分の部屋に戻った。後にはヴァルトンとリツカルド、そして従者や兵士達が残っていた。彼等は皆一様に暗く沈んだ顔となっていた。

「何ということだ」

ヴァルトンは俯いて首を横に振ってそう言うだけであった。

「こんなことになるとは」

「殿」

リツカルドが声をかけようとする。だがそれはとてもできなかった。

「いえ、いいです」

「済まない」

そう言つと彼は自分の部屋に帰ろうとする。だがそれを止めた。

そして他の者に対して言った。

「どうしてこのようになったのかはわからない」

「はい」

「だが一つだけ言っておく」

その声は沈んだものであった。しかし確かなものであった。彼は  
その確かな声で言った。

「彼女の心を乱した者には神の裁きがあろう。それだけだ」

「私のことだ」

リツカルドはそれを聞いて心の中で思った。しかしそれは口には  
出せなかった。心の中で思うだけであった。

城は沈んだ空気に覆われてしまった。戦いの角笛の音と武具が鳴  
る音だけが聞こえる。だがそれは勇ましいものではなく地獄の沈ん  
だ空気のようにであった。

## 第二幕その一

### 第二幕 許される婚姻

エルヴィーラの心が乱れてから暫く時が経った。城の中は相変わらず沈み沈黙と絶望が支配するようになっていた。その中ジョルジヨもまた暗い顔をしていた。

今日もエルヴィーラを見舞う。だが彼女はやはり虚空を見てアルトウーロのことを言うばかりであった。それに対して何もできない自分に対して暗く沈んだ怒りを抱くだけであった。

部屋を出る。そして広間に入る。するとそこに従者が声をかけてきた。

「如何ですか」

ジョルジヨはそれに対して黙って首を横に振るだけであった。従者はそれを見て暗い顔になった。

「そうですか」

「ああ。変わりはない。今は休んではいるが」

「けれど目覚められたらまた」

「それは言わない方がいい」

ジョルジヨは従者に対してそう言った。

「言っても何にもならないからな」

「わかりました」

彼は答えた。そしてジョルジヨと別れてその場を去った。ジョルジヨは城の大広間に向かった。質素でろくに裝飾もないが広い部屋である。その中央にブルーノと数人の兵士達がいた。

「ジョルジヨ様」

「そなた達はそこにいたのか」

「はい」

彼等はそれに応えた。

「先程から。何かと心配でして」

「そうか。だが心配しても何にもならぬ。気持ちはわかるがな」  
「しかし」

「よいのだ。今はそなた達の気持ちだけで。それ以上の贈り物は殿  
や私にはない。だから………。今は何も言わないでくれ」

「わかりました」

彼等はそれを受けて頷いた。

「ところで戦いの方はどうなったのだ」

「それは」

ここでリックカルドが部屋に入ってきた。

「ジョルジヨ様、こちらにおられたのですか。探しましたぞ」

「戦いのことが」

「はい」

リックカルドはそれに頷いた。

「クロムウエル卿から直々の達です」

「何と言っておられるか」

そこにいたヴァルトンは問うた。だが何を伝えてきたのかはおお  
よそわかっていた。クロムウエルは厳格な男である。その彼の直接  
の命令ならばどのようなものか容易に想像がついた。

「カヴァリエーレ侯爵を討て、と」

「やはりな」

それを聞いて頷くだけであった。

「それならば仕方ないか」

「はい」

ジョルジヨも頷くだけであった。

「それで宜しいですね」

「断ることができようか」

今度はリックカルドに対してそう答えた。

「あの方の御言葉ならばな」

「はい」

それはリックカルドにもわかっていった。表情を変えずそれに頷いた。

「出来る限り生かしたまま捕らえよ、とのことです」  
「生かしたまま」

「断頭台に送る為です。おわかりになられましたか」  
「うむ」

苦渋に満ちた顔で頷く。

「閣下にお伝えしてくれ。わかったと」

「はい」

「その返事の手紙を書かねばな。では暫く席を外すぞ」  
「わかりました。それでは」

「うむ。その間ここを頼む」

ヴァルトンはその場を後にした。そこにはジョルジヨとリツカルド、そして従者達が残された。

「ヴァルトン様のことですが」

リツカルドはヴァルトンが去つたのを見届けてからジョルジヨに声をかけてきた。

「兄上がどうかされたのか」

「クロムウエル閣下はヴァルトン様の名誉については何も仰いませんでした。むしろ褒めておられました」

「そうか」

だがそれを聞いてもジョルジヨの顔は晴れなかった。

「それ程までにか」

「はい」

だがリツカルドはジョルジヨの顔には気付かなかった。言葉を続ける。

「これはクロムウエル閣下直々の御言葉なのです」

「それはわかっている」

そしてジョルジヨは言った。

「そのうえでアルトウーロを捕らえるか討てといふのだな」

「はい」

答えた。

「そうか。仕方があるまい」

それを確かめてから溜息をついた。

「決まったことならばな。従う他にはない」

「迷っておられるのですか」

「まさか」

ジヨルジヨはそれを否定した。

「今の卿にそれを言ってもわかりはしないだろうが」

「何がでしょうか」

「そのうちわかる。いや、もうすぐかもな」

「はて」

リツカルドはわからなかった。首を傾げた。その首を傾げたその時であった。エルヴィーラの部屋から声が聞こえてきた。

「アルトウー口様」

「まさか」

ジヨルジヨはそれを聞いて青い顔で部屋の方を見た。扉が開く音がする。そして歩く音が聞こえてきた。

「まずい」

その音を聞きながら呟く。顔は青いままであった。

「まさかまた」

「どうかされたのですか」

「見ても驚かないか」

リツカルドと従者達に対して言った。

「？はい」

リツカルドは訳のわからない顔ながらもそれに頷いた。



## 第二幕その二

「そなた達も。よいか」

「はい」

従者達もであった。部屋の扉が開いた。そこからエルヴィーラが入って来た。その姿にはかつての陽気さは何処にもなかった。髪を振り乱し、視点は定まっていなかった。まさしく狂気の顔であった。

「アルトウーロ様、何処に行かれたのですか？」

彼女は辺りを見回して何かを探していた。

「私を置いて何処に行かれたのですか？」

「ジョルジヨ様、これは」

リツカルドが問うてきた。だがジョルジヨは顔を崩さなかった。

「驚かないと言った筈だが」

「ですが」

「ずっとあのままなのだ。時折ああして辺りを探して回るのだ。アルトウーロ殿を探してな」

「そんな」

「何処に隠れておられるのですか？早く出て来て下さい」

「何故このようなことに」

「言う必要はないだろう」

「はい」

従者達も沈黙してしまった。そして皆エルヴィーラを見るだけであつた。

「貴方はどなたですか？」

今度はジョルジヨに尋ねてきた。

「そなたの叔父だ。わからないのか」

「御父様ですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

答えることができなかった。答えるにはあまりにも心が辛かったからだ。

「いえ、違いますね」

「うむ」

一言そう答えるのがやっとであった。

「アルトウーロ様でしょうか」

「そうだ」

止むを得ずそう答えた。

「今ここに戻って来たぞ」

「よかった」

エルヴィーラはそれを聞いて顔を急に晴れやかにさせた。喜びの顔になった。

「戻って来られたのですね」

「うむ」

ジオルジヨはアルトウーロとなってそれに応えた。

「待たせて済まなかったな」

「いえ、構わないのです」

エルヴィーラは笑顔でそう答えた。

「戻って来られただけで私は満足ですから。では参りましょう。礼拝堂に」

そう言って誘う。

「そして共に祝いましょう。私達の幸せを。そして祈りましょう、私達の永遠の幸福を」

「何ということだ」

リツカルドはそれを見て悲嘆の声を漏らした。

「それ程までに彼を想っていたのか」

「そうなのだ」

ジオルジヨがそれに言う。

「彼女はあの方しか見えないのだ。他には何も見えない」

「盲目となられたのですね」

「そう、盲目だ。今の彼女を救えるのは一人しかいない。だがその者は今」

「何ということだ」

リツカルドは呻いた。

「このようなことになるとは」

「アルトウーロ様、では参りましょう」

「わかった」

ジョルジョが答えた。

「では先に部屋に行ってくれ。そして身支度を整えておいてくれ。よいな」

「わかりました。それでは」

頷きその場を後にした。ジョルジョはそれを見届けてから従者達に対して声をかけた。

「落ち着かせてやってくれ。葡萄酒でも渡してな」

「わかりました」

彼等はそれを受けて頷いた。そしてその場を後にした。後にはジョルジョとリツカルドだけが残った。

「アルトウーロ様」

だがまだ部屋の方からエルヴィーラの声が聞こえてきた。

「さあ、私達の他には星と月だけです。是非おいで下さい。そして共に夜の空を楽しみましょう」

「また」

二人はそれを聞いて悲しい顔になった。

「何ということか。彼女の心は戻らないのか」

「戻す方法はあるのはわかっているだろう」

リツカルドに対してそう言う。

「君自身が」

「.....」

答えなかった。だがそれでも言った。

「私は知っているのだ。だからあえて言おう」

「何を」

「今ここにいるのは君と私だけだ。それでも駄目か」

「それは……」

「どうなのだ。彼女を救いたくはないのか」

「いえ」

「ではわかったな。君の助けが必要なのだ」

「わかりました」

リックアルドはようやく頷いた。

### 第二幕その三

「ですがもう議会で決まったことなのです。いえ」  
言葉を変えた。

「クロムウエル閣下が決められたことなのです。それはもう仕方のないことなのです」

「私もクロムウエル閣下のことは知っている」  
ジョルジヨはそう言った。

「それでは」

「うむ。しかし変えることはできる。誤った決定は変えられなければならぬ」

「それを私に仰るのですか」

「他に誰に対して言えというのか」

「いえ」

また口を固くさせた。

「私以外に言われることはないでしょう」

「そうだ。私はあの時のことを知っている。あの貴婦人は王妃様だったな」

「はい」

「そして彼はあの方を御護りした。違うか」

「いえ、その通りです」

リツカルドは答えた。

「それを君は通した。おそらく君にも思うところがあったのだろう」

「否定はしません」

そう答えた。

「それにより彼女が不幸になった。それはわかるな」

「.....」

答えることができなかった。それは肯定の沈黙であった。

「君は彼女を不幸にしてしまった。そしてもう一人不幸にしたいの

か。いや、言葉を付け加えよう」

さらに言った。

「彼女をさらに不幸にしたいのか。愛する者を永遠に奪うことで」

「それは……」

「私は君のことも知っている。君はそのようなことをできるような者ではない」

「それは」

「そうであろう。今君も後悔している筈だ」

「はい……」

遂に頷いた。それを認めたのであった。

「わかりました。全てを認め貴方に従います」

「よし」

ジヨルジヨはそれを聞いて頷いた。

「やはり君は私が思った通りの男だった。私の目に狂いはなかったのだ」

それが嬉しくもあった。

「それでは今から私と君は同じだ。共に永遠の信義を誓おう」

「はい」

互いに腕に剣を入れた。その傷口を付け合う。こうして二人は血の繋がりとなった。

「この血において誓おう」

「この血において誓いました」

互いに言い合う。

「我々は二人の命の為に全てを捧げようぞ」

「はい。ですが一つ気になることがあります」

「友よ、何だ」

リツカルドの言葉に顔を向けた。

「我々は戦場に向かわなくてはなりません」

「うむ」

「その戦場に彼がいたならば……。どうしますか」

「彼は死ぬことはない。絶対に死ぬことはない」

それに対してにこやかに笑ってそう答えた。

「何故でしょうか」

「彼もまた神の加護を受けているからだ」

「神の加護を」

「そうだ。だから迷うことはない。我々は戦場においてはただ勇ましく、誇り高く戦うことだけを考えればいい。わかつたな」

「わかりました」

リツカルドは頷いた。

「戦うことだけを考えよう。そして力の限りな」

「はい」

「ラツパの音と共に進もう。そして我等は栄光と勝利を手にするのだ」

「我等の手に栄光と勝利が」

「そうだ、よいな」

「わかりました、我が同志」

「うむ、我が友よ」

彼等は固く誓い合った。そして互いに命をかけることを約束したのであった。

それからまた暫く経った。戦いがはじまりそれは清教徒達に有利に進んでいた。だが王党派の中にアルトウーロの姿は見えずその行方はようとして知れなかった。エルヴィーラの様子はそれを受けてか一向によくはならずやはり狂気のていを示したままであった。だがジョルジヨもリツカルドも最早迷いはなかった。彼等はただ戦場で力の限り戦うのであった。

## 第二幕その四

プリマスの城はその清教徒達の前線基地となっていた。ひっきりなしに兵士達が詰め、行き来していた。最早この城は清教徒達にとつて最大の軍事基地となっていたのである。

今その城を嵐が襲っていた。日が暮れその中に風と雨の音だけが聞こえる。そこを一人のマントに身を包んで男が進んでいた。彼はこっそりと城の中に入り宮殿へと向かっていた。

「誰も私には気付いてはいないか」

辺りを見回してそう呟いた。そしてマントのフードを取り外した。それはアルトウーロであった。

「よし、誰もいないな」

風と雨が急に止んだ。空は晴れわたりだし、月も姿を現わそうとしていた。黄金色の大きな月が城を照らしていた。

「敵がいないのは幸いか。だが問題はこれからだ」

上を見上げる。そこにはテラスがあった。見ればそこには白い服を着た女がいた。

「あれは」

見ればエルヴィーラであった。彼女は何かを語っていた。

アルトウーロは姿を隠して彼女を見上げた。聴けば何やら呟っているようだ。

「この唄は」

聴き覚えがあった。これはかつて彼が呟っていた唄であった。エルヴィーラの前でも披露したこともある。彼は美声の持ち主でもあり唄でも定評があったのである。

「だがおかしいな」

アルトウーロはその唄を聴きながら思った。何処か調子が外れていたりするのだ。美麗な唄の中にそれがあった。それを聴きながら不思議に思った。



「どういうことだ」

それが何故かはわからない。だが唄は次第に遠くなっていく。どうやらエルヴィーラは部屋に戻ってしまったらしい。彼はそれを残念に思った。

「彼女は一体………。むっ」

ここで人の気配を察した。姿を隠した。するとそこに兵士達がやって来た。

「夜警も楽じゃないな」

「全くだ」

彼等はそう話をしながらこつちにやって来た。

「ところであの侯爵様はどうなったんだ」

「私のことか」

彼はそれを聞いてすぐに察した。

「まだ見つからないらしい。だが生きていることは確かなようだ」

「そうか」

兵士達は同僚の話聞いて頷き合った。だが誰もその当人が側にいることは考えもしなかった。

「じゃあいずれ捕まるだろうな」

「ああ、王党派ももう終わりだ。あの侯爵様も断頭台送りだろう」

「いい方らしいがな。残念なことだ」

「それは問題じゃないさ」

一人の兵士がここでこう言った。

「問題はクロムウエル閣下と同じ考えかどうかなんだ。これは俺達だつてそうだ」

「そうだったな」

皆それを聞いて暗い顔になった。

最早イングランドにおいてクロムウエルは絶対者となるうとしていた。彼こそが法律であり彼こそが正義であった。心ある人々は密かにこれは絶対主義より危険だと感じていたがそれを口にする事はできなかつた。口にすれば自らの身に危機が及ぶからだ。そして

それを否定することももうできなくなってしまうのだ。正義は曖昧なものである。だからこそかつては王が正義であったの今ではクロムウエルが正義となっているのだ。それが変わるまでは何も言うことができなかったのである。正義は曖昧なものであるが絶対なものであるからだ。

「あの人に逆らったら俺達だって断頭台行きになるんだ。いや」

兵士は言葉を変えた。

「縛り首かもな。俺達は」

「嫌なものだ」

この当時首を切られるのは貴族の特権であった。縛り首は長い間もがき苦しむ。それを考慮してか首を切られるのもまた貴族の特権だったのである。これはローマ帝国の時代からである。ペテロはキリスト教徒として弾圧を受け首を切られているがこれは彼ローマ市民として高い地位にいたからであった。多くのキリスト教徒は餓えた獣達の餌となり惨たらしく殺されているのである。

「なりたいか？」

「馬鹿を言うな」

兵士の一人が声を少し荒わげた。

「御前だつてそうはなりたくないだろう」

「勿論だ」

「俺だつてそうだ。誰だつて死にたくはない」

「そうだな」

彼等はそのな話をしながらその場を立ち去った。アルトウーロはそれを見届けると静かに出て来た。

「行つたか」

そして再びテラスを見上げた。

「行くか、いや、どうするべきか」

彼は逡巡した。

「会いたい。だが会つてもよいものか。今の私はしがない流浪の者しかも罪を問われている。そのような者があの方に相応しいのだから」

うか  
「  
思い続ける。

## 第二幕その五

「愛のみでここまで来たが。そのみであの方を裏切ったことが許されるだろうか。いや、そんなことは有り得ない」

深い自責の念が彼の心を襲う。

「許される筈がない。彼女に会う資格なぞ私にはありはしないのだ」  
だがここでテラスに影が現われた。アルトウーロはそれを見てまた身を隠した。エルヴィーラであった。

「あの方が」

「アルトウーロ様」

「私のことを」

彼はそれを聞いてハツとした。

「貴方は今何処におられるのでしょうか。私の愛しい貴方は」

「私のことを」

それを聞いて驚きの声を漏らした。だがそれは心の中でであり決して外に漏れることはなかった。

「おいで下さい、私の側へ。そして婚礼を」

「だが私には」

心のその言葉が深く突き刺さる。だがそれでも彼は動けなかった。

「行くべきか」

「おいで下さい」

それを聞いて足が一瞬動きかけた。だがすぐに止めた。

「いけない」

「是非私の側に」

そこでまたエルヴィーラの声が聞こえてきた。

「おいで下さい」

「駄目だ」

だが心は次第に抑えられなくなってきていた。

「是非共」

「いけない」

「私の側に」

「うつつ」

心が揺らいだ。そしてそれに逆らえなくなってきた。遂に彼は出てしまった。

「エルヴィーラ」

彼はテラスの下に姿を現わして彼女の名を呼んだ。

「私をお許し下さい」

「その声は」

エルヴィーラはそれを聞いてハツとした。テラスの下を見ればそこに彼がいた。

「アルトウーロ様」

そしてそれを見て我に返ったのであった。

「貴方なのですか？」

「はい」

彼は頷いて答えた。

「本当ですね！？本当に貴方ですね」

「どうして私でないと仰るのですか」

「いえ」

それに首を横に振った。

「まさかそのようなことが」

「そうでしょう」

彼はそれに応えた。

「私の苦しみが急に薄れていく」

「私は貴女に謝罪しなくてはなりません」

「どうしてですか？」

エルヴィーラはそれを聞いて逆に問うてきた。

「どうして貴方が私に謝罪しなくてはならないのですか？」

「私はあの時貴女の側から消えました」

彼はそう答えた。

「そのせいで貴女を苦しめてしまいました。申し訳ありませんでした」

「いいのです」

だがエルヴィーラはそれに対して微笑んでそう答えた。

「いいとは」

「私は貴方が今ここにいらっしゃるだけでいいのです。私に会いにここまで来られたのでしょうか？」

「はい」

彼はそれを認めた。

「それで私の苦しみと悲しみは終わりました。貴方が来られたおかげで」

「エルヴィーラ……」

「アルトウーロ様」

エルヴィーラはまた彼の名を呼んだ。

「何でしょうか」

「これで私達は永遠に一緒ですね」

「はい」

彼は答えた。

「何があるうとも。これで私達は永遠に離れることはありません」  
「ですね」

それを聞いて微笑んで頷いた。

「この三ヶ月の間御心配をおかけしました」

「三ヶ月ではありませんでした」

「といたしますと」

「三世紀。私にとってはそれ程長く感じられました。私にとってはそれ程長い苦しみでした」

「申し訳ありません」

「ですがその苦しみも今終わりました」

喜びに満ちた声で言う。

「私が陛下を御護りしたばかりに」

「陛下を？」

エルヴィーラはそれを聞いて顔色を変えた。

「貴方と共にこの城を出られたあの方は陛下だったのですか？」

「はい」

アルトウーロは答えた。

「あの方こそエンリケッタ王妃でした。今あの方は安全な場所で身を隠しておられます」

「それでは貴方は陛下を御護りする為にこの城を」

「はい」

また答えた。

「そうだったのですか」

「真に申し訳ありませんでした」

「何を謝れる必要があるのですか？」

だがエルヴィーラは首を垂れる彼に対してそう言葉を返した。

「といたします」

「貴方は御自身の主君を護られたのですね」

「そういう結果にはなりません」

「それは誇らしいことではないでしょうか。私はその様な方を生涯の伴侶とすることに誇りを持ちたいと思っております」

「誇りを」

「はい」

エルヴィーラは答えた。

「貴方は私の誇りです。気高い騎士です」

「気高い騎士……」

「そうです。気高い騎士よ」

騎士に声をかける。

「是非こちらにおいて下さい。そして共に永遠の幸福を誓いませう」

「宜しいのですか？」

「勿論です。さあ、早く来て下さい」

「しかし」

「是非」

エルヴィーラは誘う。

「その為にこちらへ来られたのでしょうか」

「ですが」

「お願いです」

エルヴィーラはまた言った。

「さあ、どうぞ」

「よいのですか」

「神が許して頂けます、全てを」

「神が」

それを聞いてアルトゥーロの心が動いた。

「そう、そして私が。それでよいでしょう」

「わかりました」

アルトゥーロはそれを聞いてようやく頷いた。

「エルヴィーラ」

「はい」

その問いにエルヴィーラは頷いた。



## 第二幕その六

「貴女と共に」

「私も」

彼女もそれに答えた。

「貴方と共に」

「ええ、永遠に」

だがここで異変が起こった。不意にエルヴィーラの顔が真つ青となつたのである。

「ああ」

「どうされたのですか!？」

「あの音が」

「あの音」

そう言われたアルトウーロもはっとした。聞けば夜の闇の中に太鼓の音が聞こえてくる。これは地獄の奥底からの死神の太鼓の音であつたのだろうか。

「あの太鼓は」

「御安心下さい」

すぐにエルヴィーラを宥める為に声をかけた。

「あれは地獄からの太鼓ではありません」

「それでは一体」

「あれは……」

見れば将兵達がいた。彼等はゆっくりとアルトウーロのいるテラスの下にやって来る。見れば手に松明を持っている。

「カヴァリエーレ侯爵」

その先頭にいるリツカルドが彼に語りかけてきた。

「貴方ですか」

「そうだ」

アルトウーロはそれに答えた。最早観念していた。

「私こそアルトウーロ」カヴァリエーレだ。顔と家紋を見るか」  
「いえ」

リツカルドはそれには首を横に振った。

「ここが何処なのか御存知ですか」

「無論」

彼はまた答えた。

「それでもあえてここに来たのだ」

「左様ですか」

それを聞いて頷いた。

「それでは宜しいですね」

「はい」

兵士達がアルトウーロを取り囲む。彼はそれに対して抵抗しようはしなかった。大人しく従うつもりであった。だがエルヴィーラは違っていた。

「お待ち下さい！」

テラスの上からそう叫んだ。

「エルヴィーラ」

アルトウーロも他の者達もそれを受けて顔を彼女の方に向けた。

「その方を私から奪わないで下さい」

「しかし」

皆それを聞いて戸惑っていた。だがそれがどうにもならないとは思っていた。

「今そちらに」

そう言うとテラスから姿を消した。そしてすぐにアルトウーロの側に駆け寄ってきた。

「この方を私から離すことは誰にもできません」

「神以外の誰にも、ですか」

「はい」

エルヴィーラは答えた。

「いえ、例え神が分かとうとも私はこの方と共にいます。それが私

の唯一の望みなのですから」

「どうしてもですか」

「どうしても」

その声に揺るぎはなかった。

「この方だけは失うわけにはいきません」

「エルヴィーラ……」

アルトウーロだけではなかった。皆それに心を打たれた。

リツカルドもであった。だがそれでも彼は言わざるを得なかった。

「エルヴィーラ様」

「はい」

「我々はクロムウエル閣下の御命令に従わなくてはならないのです」

「どうしてもですか」

「はい」

彼は答えた。

「今はクロムウエル閣下こそ正義なのですから」

「正義が変わってもですか」

「正義が変わることはありません」

リツカルドは硬い声でそう答えた。

「それが正義なのですから」

「それはどうだろうか」

だがここで一人の老人の声がした。ジヨルジヨがこの場にやって来たのだ。

「ジヨルジヨ殿」

「正義は神と共にある。神の思し召しこそが正義なのではないのか」

「確かにそうですが」

リツカルドはそれを聞いて顔を俯けさせた。

「ですが今は」

「今は、だ」

彼は言った。

「だがそれは変わることができないのだ」

「ジヨルジヨ殿」

リツカルドはそれを聞いて彼に問うた。

「それは一体どういう意味でしょうか」

「お知りになりたいですか」

「はい」

「ならば。以前私は卿に言ったな」

「あの時のことですね」

かつて二人で語った時のことを思い出した。

「私達が血の絆を結んだ時」

「その時に我々は固い絆で結ばれた。今その絆の元に言おう」

彼は言った。

「私は今ここに彼が救われたことを宣言する」

「何と」

それを聞いてリツカルドと兵士達が驚きの声をあげた。

「それはどういうことですか」

この時角笛の音が聴こえてきた。テラスのところで数人の使者が姿を現わしてきたのだ。

「ジヨルジヨ殿、お待たせしました」

「あやういところでした」

ジヨルジヨは彼等に対してそう言った。

「前の戦いで王党派は遂に敗北しました」

「何と」

「それだけではありません」

使者達は言葉を続けた。

「皆、よく聞いてくれ。彼が許された理由を」

「はい」

皆それを受けて耳を澄ませた。そして使者達に目を向けた。

「クロムウエル閣下はそれを受けて残った王党派に対して恩赦を下されることとなりました。今王党派として罪を問われている者は全て赦されたのです」

「何と！」

それを聞いてアルトゥーロもリツカルドも兵士達も声をあげた。

「それでは私は」

「結ばれることに」

「そうだ」

ジョルジヨは二人に笑みを向けてそう答えた。

「そなた達を阻むものはなくなった。これで結ばれることになったな」

「はい」

二人は答えた。

「罪は許された。さあ、もう阻むものはない」

「阻むものはないのですね」

「そうだ。さあ皆祈ろう」

ジョルジヨは他の者にも声をかけた。リツカルドもその中にいた。

「二人の永遠の幸福を」

「はい！」

皆それに頷いた。そして二人の幸福と神を讃える声が城の中に木霊したのであった。

清教徒 完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3660f/>

---

清教徒

2011年4月28日00時40分発行